

「望みをいだかせるために」

詩篇 第69篇5節～9節
ローマ人への手紙 第15章1節～6節

説教 岡村 恒牧師

主イエスを通して明らかにされた神の言葉は私たちに希望をいだかせます。〈希望〉この言葉を多くの人が切実に求めています。震災復興に希望をいただいている人、あるいは新学期に向けて希望に胸ふくらませているこどもたちの姿があります。また同時に、反対の〈絶望〉という言葉も語られます。裏切り、震災、病気、思いがけない出来事で絶望を味わう。私たちは希望と絶望の間で行き来しているのかも知れません。確かな希望を握りしめて生きる事が困難な時代なのです。

目に見えるものはあなたの救い、命の為に何の役にも立たない。宗教改革者ツヴィングリがはっきりと語った言葉です。宗教改革が起きた時、教会では壮大な建築、豪華な宗教絵画、聖人の彫像が人々を圧倒しました。目に見えるものを通して神の栄光を表す事が重要だと思われました。宗教改革者達は、それらを拒否しました。ツヴィングリは十字架が拜まれることも拒否しました。大阪教会の聖堂に入られた方が、十字架がない事に驚かれることがあります。私たちの教会は、目に見えるものではなくて、目に見えないお方を信じ、語られる言葉を聞く事を第一にしている教会です。

世の終わりにはすべての目に見えるものは、巻物を巻く様に巻き去られると聖書に記されています。もちろん聖書の文字に触れるとか、現実の聖堂に入って、そこに満ちている祈りの空気に触れると言う事は、信仰の助けになります。しかし最後に私たちの信仰を堅くし、支える物は目に見えない神の言葉だけなのです。

絶望すると言うのは、そこに希望があるからです。ある説教者が紹介していましたが、ギリシャ神話にパンドラの箱が登場します。人間が地上で幸福に暮らしていく反面、神が下すべき人間の罰がパンドラの箱に閉じ込められている。驚くことに刑罰の1つが〈希望〉だと言われています。希望をいただく人間は必ず失望を知ることになるからです。今日、多くの人々は〈あきらめ〉を抱いているかもしれません。日本には、あきらめることを美德と受け止める考え方も流れているように思います。全ては無常、万物流転、そういう思想や宗教があります。しかし、あきらめて生きる事は無神論と結びつきます。

先日、福音主義教会連合関西西部会教職・信徒研修会がありました。東京神学大学の近藤勝彦学長の講演で、私たちの人生において最も思い

がけない事は、神が生きておられると言う事だ、という話しをなさいました。神が私たちに深く愛して、その愛を示すために、神ご自身が犠牲を払って絶望を引き受けて下さった。神の救いの計画が、最大の思いがけない出来事だと言うのです。

この生きておられる神の約束が実現したので、私たちは生きていても死んでいてもイエス・キリストのものであります。一人一人の価値観が違っていても、神の前では1つに結び付けられます。神に生かされ、神に知恵と力を与えられている者として隣り人を助ける生き方ができます。天地創造の前から、主イエスが神と共におられ、神と等しいお方である事が記されています。そのキリストが、あなたは私の者だと宣言して下さった以上、洗礼を受けたキリスト者は、決して弱い者ではなく、強い者だと聖書は言います。

傍らにいる神を知らない人の徳を高めるために、その益を図って彼らを喜ばすべきである。これは博愛主義ではありません。私たちは一人の人の本当の救いの為に歩いて、一緒に喜びを味わったら良い、と聖書は勧めます。神の救いについて語ってきたこの手紙全体を要約するように4節に突入します。「これまでに書かれた事からは、すべてわたしたちの教のために書かれたのであって、それは聖書の与える忍耐と慰めとによって、望みをいだかせるためである。」(4節)

主イエスが人間になって十字架に架かり、死んで下さったのは何のためか。「それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかかめ、また、あらゆる舌が、『イエス・キリストは主である』と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。」(ピリピ人への手紙 2章10-11節)

目に見えるもの、手で触る事ができるものの一切が消え去る時にも、この希望は失われません。キリストによって与えられた希望をいただく者は決して失望する事はないのです。希望はもはや私たちに与えられた刑罰ではありません。私たちの地上の旅、死の眠りの一切を整える神の豊かな恵みの賜物です。忍耐と慰めの神ご自身が、私たちの魂の奥底に、この本当の希望を植え付けて、それを支えて下さいます。そのことを共に感謝し、主のみ名を褒め称えたいと思います

(説教要約奉仕者)